



寓話 Ecotown

CL News: Vol. 22, No. 5 (May 2020)から

Patricia Ryan Madson
madsons@comcast.net

Etegami :
<http://improvwisdom.blogspot.com/2020/04/improvising-in-changing-times.html?m=1>
An article you're welcome to use.

この寓話は以前、Vol. II, No. 4 (Fall 1991) of “nothing special,” a newsletter に掲載されました。

エコタウン

エコタウン市では、水の配分が法律で定められていました。出生すると一生分の給水量が、義務と抽選くじで密かに決定され、割り当てられました。抽選は無作為でしたから、人によって百ガロンから1億ガロンの量の差がありましたが、市民は自分の配分量がどれくらいか知る由もありません。

割り当てられた水は、各人の家の裏庭におかれた巨大な貯水タンクに密封されました。タンクの横に蛇口があり、どの家のタンクも人の目には同じように見えました：それは巨大で容易に70から百年間使用できるために最も豊富な必要条件さえ満たす十分な供給ができました。

相違は、もちろん、それぞれのタンクの中の水量に違いがあったことです。実際の最高水位がどれほどか決定する方法はありませんでした。

エコタウンの市民はこの現実に対応するために、いろいろな戦略を持っていました。一人の市民はこれまで50年にわたって全市民が使用した水量の記録をつけました。統計上の正確さから一般市民が与えられる可能性が高い水量を表す図表を作成しました。

市民の一部は、水の使い過ぎを恐れて、庭作りさえせず、極度に水をけちりました。別の市民は恵まれた量と想像して祝い、ホットタブや噴水、スイミングプールを設けました。近所の人全員のために、船遊びや水泳ができる巨大な湖を作った仲間さえいたのです。

自分が与えられた水を使うことには、たくさんのたくみな計略と個人的特異性がありました。この与えられた環境で、今まで誰もしよと考えなかったのは、タンクの栓を開けて、水を目的なしに自由に流れさせることでした。もちろん、時折、芝生に水やりをしながら栓を止めるのを忘れて、長時間出しっぱなしをした市民はいます。しかし、自発的に、意識して水を浪費する人はいませんでした。

あなたがエコタウンに住んでいたら、どう配水を処理するでしょうか。

著者のコメント：一個人の人生は、この寓話の水滴のようにごくわずかだと考えてください。地球上の私たちの時間には限りがあります。蛇口の栓はしっかり閉まっていますか。

(カリフォルニア州サンフランシスコ市CLインストラクター)